

〈研究ノート〉

ワーズワスと傳統

菊池 亘

文學において「新しい」という言葉の意味はいろいろに解釋されるのであろうが、必然的に起きてくる危機をいかに迎え、またいかにこれ乗り越えようとするか、その意識ないしは努力をその一つと考えていいであろう。この意味においてたしかにワーズワスは新しい詩人であった。ワーズワスははっきりとした自覚をもって詩人活動を始めていた十八世紀末葉にはイギリスの詩壇に危機が訪れていたことは事實であり、その危機を具體的に代表するもの一つは周知のごとくポーブであった。ポーブ解釋が次第に正常なものになりつつある現代から見ればこの時代の對ポーブの態度には、あたかも彼の肉體が象徴するかのごとくかなり不具的なものがあることが判って興味があるが、當時の若い詩人たちの態度はおよそ次のようなものであった。

ハントにとってはポーブの使用するヒロイック・カブレットの形式が不満であった。そして彼は當時の詩人たちに「イギリスのヒロイック體の眞のハーモニーをとりもどし、ヒロイック

體にその音樂の眞の原則の半分——變化を復活する」ことをすすめている。ハントにとってはポーブのヒロイック體は「かっこう鳥の唄」であり單調に音の高低がくりかえされ、まるで「お經を讀んでいるみたい」であり、ポーブはどこから見てもヒロイック體の「達人」というわけにはいかない、というのである。⁽¹⁾ところがこのように十八世紀のヒロイック體を非難してはみたものの、いざ實踐になってみると當のハント自身この詩體から完全に脱皮することはできなかったのであり、また、はたしてポーブの詩體が單調なものであったかどうかはもつと客觀的にこまかに考えてみる必要があったのである。⁽²⁾このハントと大同小異な見方をしていたのはクーパーである。クーパーは「卓上閑話」(Table Talk)のなかでポーブの「音樂的な精妙さはすばらしく、耳はきわめて鋭く、筆はじつにデリケートである」(六五二—三行)と認めながらポーブは「詩を單なる機械的な技術にしてしまい、そしてどの詩人も彼の調子をそらんじている」(六五四—五行)とやはり非難しているのである。いまここに引いた四行のうち前半の二行のポーブ批評はきわめて現代的なひびきすら有しているといわなければならない。しかしクーパーの重點はやはり後半二行におかれていることはだいたい推察に誤りはないであろう。たしかにこの「機械的な技術」は讀者の耳をにぶいものにしてしまい、したがってなにか新しい變化を期待させるに充分なものがあつたのである。⁽³⁾さらに當時シェークスピア批評にかけては權威的な位置を占めており、またじつ鋭い批評感覺をもっていたコールリッジもこの「機械的な

ミーター」にひきずられたのであろうか、ポープ批評においてはひどい錯誤をおかしている、すなわち次のような言葉がそれである。「……意味がいったん判ると、その時ハーモニーは完全となる。しかるにポープおよびその派に屬する亞流の詩人の大部分においては、意味を決定するものは機械的なミーターである。」たしかにコールリッチのこの批評はおかしいがここではこれ以上こまかく觸れる必要はない。さしあたっての目的に重要なかわりをもってくるのは以上の三者に通じてみられるポープの詩の「機械性」ということであり、またこの機械性こそは詩を殺すものであるという態度である。そしてこういった態度が當時のポープ批評の基準に化してしまったということを見逃してはならない。この歸結はじつはよく考えてみるとまことに皮肉である。機械性を非難する態度そのものが機械的になつてしまったからである。そしてこの皮肉な歸結は二十世紀に入るまでずっとつづいてゆくのであるからまさにポープの不運というよりほかはない。しかし、この皮肉な歸結はたしかに何か新しいものへの期待を生みだし、また危機を生みだすのに充分であった。このような情況のもとに詩人として成長してきたのがワーズワスであり、また彼自身もまたこのような詩的情況に對して不満をもつもの一人であり、この不満を仲立としてコールリッチに結びついてゆくわけであるが、ワーズワスがこのような情況にどのように對したかということになるとこからきわめて複雑な問題がでてくる。少なくとも彼の場合いまみた三者のように簡単にいかないようであるし、またおのずから

そこに三者とは異なる態度がでてきて問題を複雑にする。ワーズワスのよき協力者であったコールリッチにとつてはポープは許すべからざる詩の破壊者であったのであるが、ワーズワスにとつてはポープのことはそれほど強く意識にのぼつてこなかったようである。ポープよりも當面の敵としてワーズワスの眼に映つたのはグレーであった。彼はグレーのどこに詩を破壊する要素を感じ取ったか。ポープが少なくとも當時の教養のある言葉をアダプトした形においてこれを詩に使用し、そしてこの種の言葉をそのもつとも高度の可能性を有するものへと高めたのは彼の逸すべからざる功績といわなければならない。ところがグレーになると機械性よりも安易性が發見されるのであり、非難にもかかわらずなしとげられたポープのような功績をみとめるわけにもいかない。グレーの安易性とはどのようなものであったか。たとえばグレーが彼の一人の友人の詩の一節について下した批評に次のようなものがある。「これは平板です、これは散文です……もし情感がつづかなければならぬというのでしたら、それをちよつとひねって格言にし、それに花をさし、それを豪華やかな表現で飾り、それをして空想、耳、あるいは心を打たせるのです、そして私は満足です。」たしかにこれでは機械性を通り越して安易性がみられる。機械性にはまだ非情の美というものが入りうる餘地がある。(もちろんこの場合とはだいたいその性質を異にはするが、詩から感情を排除することを目指したエリオットあるいはヴァレリーのことを考えてみる必要がある。)安易性こそ何よりもまず詩の敵と考えなければなら

ない。こういったグレーの態度に反撥してできあがったのはほかならぬ「抒情民謡集」であつたわけであり、グレーの完成された二つの作品、「詩歌の進歩」(The Progress of Poetry)と「詩人」(The Bard)はさらにサミュエル・ジョンソンからも手きびしく攻撃されなければならなかつたのである。したがってワーズワスがグレーのオードのなかに感じとつたものはおそらく原初の詩人たちが現實のことからよって刺激された情熱から書いた大膽にして象徴的な詩とおよそ裏腹なものであつた。そしてそこにてでてくるのはそのような言葉をただ機械的にとり入れてみるだけであり、自然なつながりは失われてゆき、かくして言葉は無神経につくりだされ、およそいかなる情況における人間の實際の言葉とも異つてくるということであつた。さらにもう一度これをまとめてみると次のようになってくる。詩が洗練された會話體で書かれた理性的な説教に飽滿したとき、グレーは「現代の言葉は決して詩の言葉ではない」と書いた。そしてグレーの實踐からでてくる「厄介な華麗」に飽きたときワーズワスはこれを否定したのである。したがって間接的にいえばワーズワスはグレーを通してポーブを否定したことになるのであるが、少なくともワーズワスの意識内に強く入つてくるのはグレーであり、そしてグレーのなかに詩に對する危険性をはつきり見てとつていたのは幾人かのローマン派の詩人群(もつとくわしくいえば一七七〇年代に生れた前期ローマン派の詩人群)のなかではワーズワスただ一人ではなかつたらうか。さらに時間的にいってポーブよりもグレーが自分たちの時

代に近かつただけにその危険性をより強く意識したということでは決して平凡な感覺ではないのである。もしワーズワスがグレイよりも一時代前のポーブに當面の敵を見出したとしたら、はたしてワーズワスの反撥的な態度が効果的な成功をおさめたかどうか疑問としなければならぬ。ここにもワーズワスの一種の時代感覺ともいふべきもののひらめきが見えている。(さらにここに重要なことはワーズワスが行なつたグレーの「詩歌の進歩」と「詩人」に對する攻撃がジョンソンと一致することである。また、はたしてこの二人の攻撃は偶然的なものか、あるいはまたすでにワーズワスがジョンソンの攻撃を知つていてこれを利用したものであるかはさらに考究にあたひすることであるが、ここから十八世紀とワーズワスのつながりができそうである。)この一種の時代感覺、少なくともさきに述べたポーブに對する當時の共通した機械的な歸結にわずらわされたいワーズワスの感覺の正しさだけでもいうに新しい意義を有しているといわなければならぬ。このような感覺の持主である彼が人間性の復活をそのなかに認めようとしてフランス革命に絶望しなければならなかつたのは當然であり、新しい詩人に絶望はすでに豫定されていたのである。

グレーの「厄介な華麗さ」に飽滿したワーズワスはそこに詩を窒息させる要素を見てとつた。この要素をとり除くことがまた新しい詩人の任務でもあつた。彼はこの窒息状態にある詩を救ふものは、人工の裝飾をはぎとつた原初の詩人たちの有していた言葉、すなわち人間の現實的な情況と自然なつながりをも

つ象徴的な言葉でなければならぬことはすでに十分に承知していた。そしてここに含まれていくつかの条件をみたすものは素朴な (simple) 言葉でなければならぬ。しからばこの言葉を支えるべき素朴さ (simplicity) ということはいかなる意味をもち、またいかにして回復されるのか、このように一見單純きわまるたつた一つの命題を解決するためにワーズワスはその詩人的生涯を賭けたといつてもいいし、またそこに眞に彼の詩人としての新しい意義をもった存在理由がでてくるのである。かくして「抒情民謡集」を通してワーズワスの方向は決つてくる。人間の進歩といつてみたところで、これをひっくり返してみればことごとく人間の素朴さをはく奪する努力ではないか。ワーズワスはこの人間の逆説的な努力もまたはつきりと意識していた當時のただ一人の詩人であるといつていい。これは詩にだけ限らず人間の危機にも直結してくる。この危機の二重性をワーズワスは的確に感じ取っている。

この二重性を含む危機を切抜けようとしてワーズワスの求めた「素朴さ」はじつはずで十八世紀の詩人たちによって一應完成されていたのである。これをそのまま踏襲することは容易なことであるが、もしそれを實行したならば、みずから墓穴を掘ることになることぐらいはワーズワス自身充分に納得していたことにはがいない。ここにいわゆる質的轉換を行うことが必要となつてくる。十八世紀の詩人たちによってなし遂げられた「素朴さ」とはいかなるものであるか。(もちろん改めていう必要はあるまいがこの場合も當然ながら「素朴さ」は「自然」

(natural) であることと結びついている。) 十八世紀のネオ・クラシックの詩人たちは素朴であることを望んでいた。しかしこれは論理の明晰を得るための素朴でなければならなかった。そして素朴を求める以上これは今述べた通り自然であることも同時に要求されてくる。しかしながら彼らのいう自然であるといふことは必要であるといふことに近い意味をもち、いいかえればこの世の論理的な秩序といふことを意味していたのである。一言でいえば素朴といふ自然といつてもこの基底にあるものは論理と理性である。ところが論理ないし理性は今ワーズワスが直面している危機を救うに充分なものであるかどうかといふとただちに疑問となる。さらにそれだけではなく論理と理性のつかむものは幻影にすぎない。ここに十八世紀のネオ・クラシックの詩人たちの弱みと誤りのあることも當然ワーズワスによつて見抜かれていたことであろう。したがつて詩をして正しい軌道に乗せるためには論理とか理性とかを適切に處理してしまわなければならない。ここにおいてワーズワスの新しさが充分にその意義を發揮してくる。彼の目指す素朴とは全く論理的明晰とは質を異にするものでなければならぬ。十八世紀の詩人たちは「詩の論理的明晰さ」を求めたが、ワーズワスはこれを「詩人の感情の明晰さ」へとその方向を變えてしまったのである。ここには感情をそこない、自然さを破壊するものとしての理性へのはげしい不信がある。これで完全に理性は處理されたことになる。感情の明晰さは感情の正確な動きを意味する。この動きを除いていふ詩を作りだすものはほかにない。

るだろうか。ここでもう一度今ワーズワスの行なった質的轉換を考えてみる必要がある。「詩の論理的明晰さ」から「詩人の感情の明晰さ」への轉換は明らかに詩の人間的な回復を意味する。このように詩のなかに人間の復位を企てたことは當時としてはたしかに革命的な意義を帯びていたのである。したがってここにおいてワーズワスおよびその一群の詩人たちの動きは新しかったのである。さらにここからまた別の重要な問題が生じてくる、すなわち新しい詩をささえるものは「詩人の感情の明晰さ」であり、したがって人間的な素朴さであるということになる。これを現實において求めようとする場合どこにまた何に求めるべきであるか。たしかに言葉の意味においては質的な轉換はなされた。しかしこの轉換が現實において實踐されなければ轉換の対象となつた十八世紀の詩人たちの範圍を一步も出るものではなくなってくる。あるいはむしろ退化を意味しかねないことになる。こういうことは根本的なことであるだけにこの問題の解決はワーズワスにとっておそらく大きな苦惱となつておそいかかつていったであらうと考えられる。これはたしかに彼にとつては詩人という本質的なものを賭けた問題であつたにちがいない。彼をとりまく危機の二重性の一つとして人間性をはく奪してやまない人工の裝飾があつた。この裝飾に汚されずまじく原初の姿をそのままとどめているのはほかならぬ自然の姿である。これだけはたしかに原初の姿をそのままにとどめている唯一のものであるといつていい。この自然の姿に強くワーズワスが引かれていったのは當然であつた。しかし

當然であつたとはいへこの態度に出たのはワーズワスが最初であるというわけにはいかない。すでにそこには自然への通路が拓かれていたことは文學史の教える通りであり、これはこのまま信じていい。しかしワーズワスはここでもう一度このすでに通路の拓かれていた自然に對して質的轉換を行ななければならぬのである。自然に對して再度轉換を行なうことによつてここに新しい素朴さ、ワーズワスという一人の近代人の苦惱を通して把握された新しい意味の素朴さが出てくる。かくしてその素朴さの支える言葉とその言葉によつて作り出される詩は全く新しい形を獲得することになる。今までいくどか素朴という言葉が出てきたが、なぜワーズワスが執拗に素朴を求めたかといううと、もつとも素朴な形を見つめることによつて人間生活の根本を把握しようとする努力(9)だからである。そして自然は彼にとつてもつとも感動の深まったときは常に、たんなる外部的な樂しい、あるいは刺激を與えてくる環境ではなく、じつに彼自身の精神のボタンになつてくる。すなわち彼にとつて自然はたんなる外的現象ではなく自己の精神が投影された存在であつた。したがつて彼にとつては自然の素朴な姿を見つめることは自己の精神を見つめることにほかならなかつた。そして自己の精神を見つめることはまた人間の心を見つめることにほかならなかつた。かくして彼は人間の素朴な姿ないしは根本的な姿を把握しようとするのであつた。このような態度はすでに今までの自然觀に對して質的轉換を行なうのに充分なものをもつてゐる。この自然觀は彼を十八世紀、あるいは十九世紀からすらも引き

離すのに充分なものがあつた。⁽¹¹⁾

このようにしてすでにここに新しい型の詩人ワーズワスが生れたことになるのであるが、ここで論をやめるとワーズワスの自然観についての解釋は充分とは言えなくなる。すでに述べたように彼は今までの自然観の方向を見事に轉じたことになるのであるが、しからば従來の自然観は彼にとつては無用の形骸であつたかどうか、一應疑つてみる必要があろう。彼はたしかに新しさを生みだしてみせたが、この新しさにじつは彼を誤解させる要素が含まれていることを注意しなければならぬ。この新しさにはあたかも平行するようになつて十八世紀的なものがついてまわるのである。ここでもわれわれはある作家なり作品を批評する際には常に威勢のいい裁斷は警戒しなければならぬことを思いだす必要がある。この十八世紀的なものとはどのようなものであるか。おそらく十八世紀の詩の大きな特色として、憂うつにして廢墟的なものに對する感情を擧げうるであらう。⁽¹²⁾ この憂うつな廢墟感是一種の歴史的感覚と結びつき、ここに自然と歴史の結合が生みだされてくる。すなわち自然のうちには時間と空間の移り變りを認めることになる。そして自然のうちには「過去の過去性」をはっきり意識することになる。この自然と歴史の結合と「過去の過去性」をはっきり意識していたのはワーズワスが當面の敵として攻撃の對象としなければならなかつたグレイであつたことはまことに皮肉なことといわなければならぬ。⁽¹³⁾ この十八世紀的な色彩はワーズワスの敵對的態度にもかかわらず否應なく彼の詩に流れてゆく。したがって

ワーズワスの詩は意外に自然との必然的なかわりが少なく、自然と歴史との結合感が強いという點⁽¹⁴⁾においてグレイを先驅者の一人に數えなければならぬのである。したがって彼には十八世紀的な平板な自然詩を書く可能性も含まれているのである。この種の平板性が「ディンタン・アベ」(Lines written above Tintern Abbey)⁽¹⁵⁾において見られると指摘されても致しかたのないことなのである。すなわちこれは自然をたんなる外的現象としてみる態度である。われわれはワーズワスの自然観を理想化してゆがめてしまつてはならない。必ずしも彼の自然詩は成功するとは限らないのである。さらに自然と歴史の結合の強さということであるが、この感覚も十八世紀的なものであつて、羊飼、少年時代の遊び、賤しい家の相應な生活などとはことごとく歴史のもつ遍在的な強い力と結びつけられてゆき、そしてそこに自然の人間化が行なわれてゆく。この方法は十八世紀のものであつたのであり、ワーズワスにおいてその頂點に達したのである。⁽¹⁶⁾ この點からみればたしかに彼を十八世紀人といつてもいい。

このように彼の自然観には新しいものと古いものとがはっきり平行的な線となつて延びているのであるから、ワーズワスをして新しい型の詩人としての存在意義をもたせているのはさきに述べたように自然のなかに自己の精神を投影させて、それを見つめることのできた態度のみかかつているのである。このきわめて簡単な仕事をなしとげることに彼は全力をあげたのであり、またそれに見事に成功したのである。ここにおいてワ

ツワスと傳統というこの小論のタイトルは殆ど説明されたことになるが、さらにもう一度これを要約してみると、次のような結論がでてくる。すなわちワーツワスは一人の力をもつてしてはいかんともすることのできない傳統というものをたくみに利用しながらこれに質的轉換を加えてそこに新しい意義を回復させたのである。こうすることによって危機に面していた傳統はよみがえったのである。そしてこのようにしてワーツワスによってよみがえさせられた傳統はスペンサー、シェークスピア、ミルトンとつながってきた傳統へと再び結びつき始めるのである。考えてみればワーツワスの詩人としての生きかたには奇跡的なところがある。

- (1) G. Tilloston, *Pope and Human Nature*, Oxford, 1958, pp. 182—3.
 (2) *Ib.*, p. 185.
 (3) *Ib.*, p. 188.

- (4) *Ib.*, p. 189.
 (5) G. Hough, *The Romantic Poets*, Hutchinson's Univ. Lib., 1953, pp. 20—1.
 (6) *Ib.*, p. 78.
 (7)(8) C. Brooks, *Modern Poetry and the Tradition*, The Univ. of North Carolina Pr., 1939, p. 236.
 (9) G. Hough, *op. cit.*, p. 71.
 (10) D. S. Brewer, *Proteus*, Kenkyusha, 1958, p. 179.
 (11) *Ib.*, p. 181.
 (12) *Ib.*, p. 31.
 (13) *Ib.*, pp. 163—4.
 (14) *Ib.*, p. 168.
 (15) *Ib.*, p. 170.
 (16) *Ib.*, p. 173.

(一橋大學助教授)